

■ グリーグ／ピアノ協奏曲 イ短調 Op.16

エドヴァルド・グリーグ（1843-1907）はずば抜けたピアノの名手だった。幸運にも残されている彼の演奏の録音からは、ユーモラスな閃きや気品のある演奏ぶりやテクニクのすばらしさを窺い知ることができる。6歳で母親から手ほどきを受けた後、音楽院でも音楽理論や作曲とともにピアノを学んだ彼にとって、ピアノ独奏曲やピアノを含んでいるアンサンブルのための作品は思う存分、独創性を発揮できるジャンルだったにちがいない。

グリーグの代表作に挙げられる初期のピアノ協奏曲はまさに個性の結晶である。ティンパニに導かれて、決然と高音域から降りてくるピアノの楽想は、一度聴いたら忘れられない始まりだ。第1楽章アレグロ・モルト・モデラートは協奏的ソナタ形式だが、従来の管弦楽による呈示は省略。独奏ピアノに続いて、木管が呈示する第1主題は北欧民謡風の素朴な楽想とロマンティックな楽想が組み合わされている。終わり近くに作曲家自身の書いたカデンツァがある。第2楽章アダージョは冒頭で哀感を帯びたメロディが瞑想的に奏でられる。複合3部形式。続けて演奏される第3楽章アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカートは自由なロンド・ソナタ形式。みずみずしい響きが横溢し、ぴりっとした北国の空気を感じさせる中、のどかな第2主題は牧歌的な雰囲気漂わせて温かい気持ち呼び起こす。

作曲されたのは1868年の夏。ちょうど妻と赤ちゃんを連れて訪れていたデンマークのコペンハーゲン郊外にあるセレレズでのことで、翌年、コペンハーゲンで行われた初演は大成功を収めた。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

※スコア上の表記